

への集積が良好な6例中4例はMR以上を示した。

まとめ 動注リザーバーより^{99m}Tc-MAAを注入した肝への分布と治療効果は関連がみられ、これが不均等な場合はカテ位置の変更や血行変更術を行う必要があると思われた。

13. 糖尿病患者に対する血清ミオシン測定の臨床的意義の検討

西巻 博 石井 勝巳 依田 一重
(北里大・放)

今回われわれは、糖尿病患者において血清中の心筋ミオシン軽鎖I(以下、ミオシン)を測定し、潜在的な心筋障害の有無について検討した。本院内科外来を受診した糖尿病患者のうち無作為抽出された53例のうち、腎機能が正常の42例について、血清ミオシン値と血清CPK値、臨床経過を比較検討した。血清ミオシン値が高値を示していたのは、42例中7例(16.7%)であり、このうち血清CPK値の高値を認めたのは2例であった。臨床経過では7例中2例に虚血性心疾患の既往がみられた。

糖尿病患者について血清ミオシン値を測定することは臨床的に有意義であり、今後も経過観察して検討する必要があると思われた。

14. 下肢浮腫に対するリンパシンチグラムによる経過観察

鈴木 孝成 横内 順一 石井 嶽
松田 裕道 黒田 真奈 井上 真吾
若林ゆかり 阿部 公彦 綱野 三郎
(東京医大・放)
新井 久之
(東京医大・老)

リンパ浮腫に対するリンパシンチグラムはリンパ管造影と比較して、手技的に容易で、重篤な合併症を引き起こすこともなく、最近その重要性は増している。われわれは、複数回リンパシンチグラムを施行した10例について、治療前後の変化や経時的な変化について検討を加えた。

対象は、下肢浮腫のある14-65歳の男性5例、女性5例で、リンパ浮腫の成因としては、一次性4例、二次性6例であった。経過観察期間は、15日から4年である。

使用医薬品は、^{99m}Tc-rheinum colloidまたは^{99m}Tc-

HSAである。

経時的な変化を比較した結果は、不变3例、悪化5例、改善2例であり、リンパ管の描出、鼠径リンパ節の描出、Dermal back flowなどのリンパシンチグラム上の所見と、臨床症状はほぼ一致した。治療の指針として、リンパ浮腫の経過を観察するのに有用と考えられる。

15. 悪性膀胱褐色細胞腫の1治験例

町田 豊平 (慈恵医大・泌)
川上 慶司 森 豊 (同・放)

症例は31歳、男性。排尿痛と肉眼的血尿を主訴に1988年8月、当院入院。膀胱鏡検査で膀胱内に充実性の腫瘍を認め、生検にて組織学的に膀胱褐色細胞腫と診断された。既往に何度か排尿時失神を経験していた。内分泌学的検査で血中ノルアドレナリンの異常高値を示し、¹³¹I-MIBGシンチグラフィで膀胱部にのみ異常集積像を認めた。1988年9月、膀胱全摘、リンパ節郭清および尿路変更を行った。病理組織学的診断は、両側腸骨リンパ節転移を伴った膀胱褐色細胞腫であった。

¹³¹I-MIBGシンチグラフィは、褐色細胞腫の局在診断に優れており、また治療への応用が期待される。

16. 前立腺癌マーカー PA, γ Sm, PAP 同時測定の臨床的有用性

町田 豊平 上田 正山 木戸 晃
(慈恵医大・泌)

未治療前立腺癌66例、前立腺肥大症130例でPA, γ Sm, PAPを測定し、前立腺癌の腫瘍マーカーとしての臨床的有用性について検討した。未治療前立腺癌66例の血清PA, γ Sm, PAP値の陽性率はおのおの77%, 83%, 57%で、 γ Smが最も高かった。病期別陽性率は全Stageで γ Smの陽性率が高く、次いでPAであった。PAP陽性でPAおよび γ Smが陰性例の例は認めず、3マーカーとも病期の進行に伴い高値を示す傾向が見られた。細胞分化度別の陽性率は3マーカーとも、高分化型と比較し、中、低分化型で陽性率が高い傾向が見られた。PA, γ Sm, PAP同時測定で、3マーカーとも陽性例は37例53%、2マーカーでは14例22%，1マーカーでは5例8%であった。Sensitivity, Specificity, EfficiencyはおのおのPAは77%, 82%, 63%, γ Smは83%, 59%,

49%, PAP では 57%, 91%, 51% で, Sensitivity では γ Sm が最も優れるが, Specificity は PAP が勝り, Efficiency は PA が優れていた。

17. 前立腺癌の経過観察における骨スキャンと PAP 測定の価値

相澤 卓 松本 哲夫 間宮 良美
三木 誠 (東京医大・泌)

抗男性ホルモン療法を中心として治療した過去5年間の前立腺癌 87例のうち, 骨シンチグラフィを2回以上実施し, かつ PAP・RIA でも経過を追跡できたのは 30 症例である。

これらの例で一定期間の前後で骨シンチを対比できる単位(2回実施は1単位, 3回実施は2単位とし)について, 骨シンチと PAP 値を対比検討した。

PAP の変動と骨シンチの変化が一致したのは, 50 単位中 27 単位 54% であった。しかし, PAP の変動が 1 ~ 2か月で 10 ng/ml 以上あったものに限ると, 骨シンチの変化との一致率は 70.6% で認められた。特に短期間に 10 ng/ml 以上 PAP 値が上昇した場合はすべて骨シンチも悪化していた。いわゆる flare phenomenon はわずか 3.3% でみられたのみであった。

前立腺癌の経過観察に当っては, PAP などの腫瘍マーカーを 1 ~ 2か月ごとに検査し, それが急上昇した時または強い臨床症状が出たときのみシンチグラフィを実施すればよい。

18. 骨シンチグラフィーにおける肋骨の早期骨転移所見の検討

蓑島 聰 岡田 淳一 有水 昇
(千葉大・放)

19. 髄芽細胞腫患者における骨シンチグラフィ

小須田 茂 鎌田 憲子 鈴木 謙三
(都立駒込病院・放)

Medulloblastoma は小児小脳虫部に好発する未分化腫瘍であるが, 骨転移例に遭遇することはまれである。最近, 3 例の Medulloblastoma 患者に骨シンチを施行し, 2 例に異常集積を認めた。1 例はいわゆる super bone

scan を示し, レントゲン写真上, びまん性の造骨性変化を認めた。

Medulloblastoma に対する各種治療法の進歩により, 患者の生存率は向上している。長期生存例に頭蓋外転移の生じる危険性が高いとすると, 骨転移が最も高頻度であり, 患者の経過観察に骨シンチは有用と考えられた。

20. MFH に対する ^{67}Ga シンチグラフィの有用性について

太田 洋 尾崎 裕 雨宮 謙
竹内 信良 白形 彰宏 玉本 文彦
住 幸治 片山 仁

(順天堂浦安病院・放)

malignant fibrous histiocytoma (以下 MFH) は, 中高年の四肢および後腹膜に好発する軟部組織由来の悪性腫瘍である。今回, 手術および培養で病理学的に MFH と診断された 5 例について, ^{67}Ga シンチグラフィの有用性を各種画像診断と比較検討した。MFH は, その病理組織像の多彩さを反映して, 画像診断の所見も多彩で決め手となる所見に乏しかった。その中で, ^{67}Ga シンチグラフィは, これのみで質的診断は困難なもの 4 例中 3 例で集積しており, 特に病巣の広がりや治療後の経過観察に有用であると思われた。

21. 仙骨 chordoma 3 症例の骨シンチ・Ga シンチ

小野 慶 (神奈川県立がんセ・核)
橋田 和義 (同・整外)
猪狩 秀則 (横浜市大・放)

chordoma は胎生期の脊索の遺残から発生する悪性の骨腫瘍であるが, 発症頻度の低いことも関係して, 核医学的所見の報告は少ない。最近 3 年間に 3 例の chordoma を経験したので骨シンチ, Ga シンチを中心に報告した。

全例男性, 年齢は 54 歳, 63 歳, 86 歳。初診時の腫瘍の大きさはおのおの 17 × 15 × 14, 7 × 7 × 5, 15 × 15 × 13 cm を示した。骨シンチでは腫瘍自体への集積は乏しく 63 歳例では正常骨より低く, いわゆる cold を呈していた。Ga シンチでは腫瘍の集積性は低く 86 歳例では cold を示した。骨盤内に腫瘍は発育するため腸管内 Ga の残存は増加し, 圧迫, 偏位の同定が必要となった。骨シン